

「横に『くぼみ』と書いてあるボタンを押して頂戴」

エレベーターはがたがた揺れた。そしてすべるようにくぼみの前まで昇って行った。そこには、それまで有徳であった一人の税務吏員の運命と夢の才七天国があったのだ。そしてジミトラキスは押しているボタンから指を引く勇気を持たなかった。

『今夜、シナでは何人のマンダリンが死ぬのかな?』と彼はくり返し自問した。

だがブラー夫人の赤い唇が彼の口を封鎖した。

— 終 —

カラガーツィスについて

現代ギリシアの代表的な散文作家の一人であるカラガーツィス (M. Karagatsis——本名はジミトリス・ロドブロス) は 1908 年アテネに生まれ、法律と政治学とを学んだ。しかし弁護士や政治学者としての経歴をふまず、文学者として名をなした。1929 年に短篇小説「ニーツァ夫人」で文学界に登場、そのあと、長篇小説「リャブキン大佐」(1933) を発表、つづいて「ユンケルマン」その他数々の短篇、長篇の小説を書いた。多作家であったが、1960 年に没した。

カラガーツィスの作品には、人間の不健康な面との対決をテーマとしたものが多く、ペシミズムとフロイディズムがその思想の底を流れている。話の発端、運び、結びといった小説技法における物語り作者としてのすぐれた才能とその豊かな空想力とは、彼の作品を読んで面白いものにしており、数多い熱心な読者をもっている。

ここに訳出した「マンダリンのボタン」は短篇集「雨の水」(1950) の中の一篇である。かならずしもすぐれた作とは言えないかもしれないが、しかしこれによってカラガーツィスの作風のおよそは窺うことができるであろう。(J.O.)

五郎やんとがわつば 長崎県民話 (その3)

横 山 悌 志

おじい、今夜もまたなんかおもしろく話ばきかせんな。ううんよしよし、そいでんおまいのと話のしいた子ばめずらしいかばい。そぎゃん云うぎと、今夜はなんの話ばしゅうかにや。そうそう、こにゃあだ (このあいだ) のがわつばの話の続きばしてきかしゅうだい。

ずうっとむかし、早岐のうわばり（上原に）五郎やんってゆうて、昔わっかときにやあ、宮相撲どんといよった男のおったぎやなたい。こん男は身体も太かし、力も強かったもんじゃいせん、だいで上原五郎っていいよったぎやにあ。

この五郎やんは、早岐ん町の太か造酒屋の樽取いばしよったふうたい。そん日も仕事ばあがっていつもんごと、酒屋から酒のごっつおうどんうけて、いっぴゃあ気嫌で、もう日暮れ頃、早岐橋んとこまできたぎい、ひょこっと、どっから出てきたこっちゃいり、あって、かすいのきもんば着た、こまかななつ、やつぐりゃの子どもが来て、五郎やんに、「おんちゃん、相撲とろい！」って言うたもよたい。

五郎やんは、こぎゃん子どもが今じぶんって、一寸はへんに思ふたとないどん、いっぴゃあ気嫌もあったもんじゃいせん、ぞうたんはんぶん、^ん「よおし、そいぎいっちょ相撲とろだい。ないどん、負けたって泣きつもらんぞ。さあこい！」っていうたぎ、「おんちゃんばほたいなげてやるっちゃいせん、覚悟はよかな！」って子どもは言うたぎやな。五郎やんはそいば聴いて、面白半分組みちいてきた子どもは、ようらところびやあたって（ころんでも痛くないように、^{ゆっ}^{くり}ところばしたそいな）そいぎやってその拍子、おなじもんのこたる、ふたいの子供め（もに）なって「おんちゃんは、そんくりゃの力しきやなかな！ ほんきで相撲とろい！」って二人してゆうたぎやな。五郎やんは、そいぎって言うて、前のこと手加減せえじ、こんだあ本気な^てふたいの子どもばころびやあたりや、あってこんだ子どもが四人にない、四人はほたりや八人にない、そいばほたれば十六人にないして、ほたればほたる程にんずのふえて、そりやそりや子どもがいっぴやなって五郎やんにかかってくるとたい。はじめは、五郎やんも子どもがことじゃいせんって遠慮しとったちゅういどん、もうそうなたたぎい力いっぴゃあ、あっちほたい、こっちほたい、汗びっしょいになって「わいどんがいくらきたっちゃおれの^す（くたばる）もんか、いくらでんこい！」ってゆうて、ふうふうゆうてしよらしたちゅうもん。

丁度そけえ、五郎やんば知っとる、コンニャク屋のおやじのとおいかかって、見てみりや、あって、五郎やんがひといで「さあこい、やあこい、わあいどめ（おまえたち）にゃ負けん」って、あっちいきこっちいきして、相撲とるごとしよるもんじゃいせん「五郎やん、なんしよいますな？」っていうぎ、「んんにゃ、あって、さいぜん（さき程）から、子どもが相撲とろいっていうせん、相撲とってほたればほたるしこにんずんふえて、どうもこうもしょんなかとじゃすばい」「子どもと相撲といよるって云ういどん、あって、子どもおらんじゃござせんな」「おらんことのあるもんじゃすな、ほりゃ、そけもおる、こけもおる、あすけもおる、またきた、わいどめ負けるか、よいしょよいしょ」五郎やんのひと相撲にびくいたコンニャク屋のおやじは、

「こりゃ、五郎さんはただごとじゃなか」っておもて、酒屋からわっかもんば連れてきてようよ
かよ、はかぐるう五郎さんば上原の五郎さんの家（え）まで連れていったもよたい。それから、
五郎さんは五日も六日も熱んでて、酒屋の樽といだんじゃなかったぎゃな、あとで五郎さんの言
うことによ、ありゃ河童のしわざやったちゅう話たい。

そいぎ、今夜はこいでおじじの話もおしみやあたひ。またあすん晩に、はにゃあてやるせんに
や。

民話になって残るくらいだから、河童はよほどの相撲好きだったらしい。水の近くでがわっ
ぱに会って「相撲とろい」と言われたら、必ず水から離れた畑の真中に連れて行ってやるよう
にという、伝説さえ残っている。これは、河童の急所は頭の上の皿で、これが乾いて水気がなく
なると、全身の機能がにぶるというところからきている。また、それでも負けそうになったとき
は、最後の手段として、歯をむき出しにして噛みつくふりをしたら河童はおそれをなして逃げる
ということである。これは前号に書いたように、彼らは人間の歯をひどく怖れているからだ。

教育実習をかえりみて

英 語 科

宮 本 邦 彦

「広大言語」に「教育実習をかえりみて」と題するレポートが初めて登場したのはオ三号にお
いてであったかと思う。オ五号では、どういうわけか、これが収録されていなかった。しかし、
我々の先輩の約七割が現在教職についておられるという事だけを考えても、この種のレポートは、
とりあげられるだけの価値をもっているものと思う。又、実際に、オ四号の教育実習録は、大い
に役立ったと思い、今号にも投稿したのである。

☆

☆

☆

夏休みがまだ終わらない九月七日に、中、高等学校教育実習のオリエンテーションが行われ、八
日から二十日までが実習。そして又十月十二日からの一週間が小学校での教育実習であった。中、
高校では教生三人に指導教官が一人割りあてられ、前半と後半で交代される。この二週間に九十
単位時間を履習しなければならないのであるが、実習は一時間で六単位時間、批評会は一時間に
つき三単位時間として認定される。自分のグループの者が実習をしている時は、教室の後でこれ
を見学し、観察記録をとらなければいけない。見学は一時間につき一単位時間として認定される。